

## 全学共通教育についての自己点検・評価報告書（教育部会用）

教育部会名：人間と社会

部会長名：廳 茂

作成者名：廳 茂

### 概要（2 ページ）

「人間と社会」教育部会は、社会に関する広い視野と深い洞察力を身につけることを学習目標として、①人文・社会科学のディシプリン（社会学、文化人類学、地理学、社会思想史）、および②現代的諸課題（現代社会論、越境する文化、生活環境と技術、学校教育と社会）の双方を視野に入れ、多岐にわたる授業科目を提供している。

授業内容は、概ねシラバスに沿って展開されている。個々の教員は、資料配布、映像・音声資料等の活用、コミュニケーションカード等の活用、双方向的な意見紹介やコメント、高校の学習内容との連続性の確認、受講者の既存の知識や観点を相対化する問題提起等、多様な工夫・努力を行っている。映像を使える講義から理論的、そして純粋に思想的内容の講義までであるので、全ての授業が今日の学生の好みに全て適合しているわけではないが、その割には、4点をこえる授業も少なくなく、学生の評価は悪くない。

クォーター制への対応には、依然として追われている。この制度へのメンバーによる批判も根強いが、対処には努めている。

学生は、1クォーターごとに履修する科目を変えており、授業する側は、その1クォーターのみで科目の概要を示さなくてはならない。しかし、7.5回というのはきわめて短く、とりわけ社会学、地理学、文化人類学、社会思想史等のディシプリンにとっては、この回数で学科の概略を示すことはむつかしい要求となっている。当然現代の学生にとって面白そうなトピックを並べ、学科に興味をもってもらうという形の授業となる。受講学生によって異なると思われるが、それで一向に構わない学生もいれば、もう少し学科の概要を学びたいと考えている、あるいは学ぶ必要のある学生も多い。＜人間と社会＞を構成する学科群にとって、クォーター制度は、現在のところ、授業を、トピックのいくつかの並列的提起、そのことによる学科への関心の喚起というレベルに終始させる面が強い。しかしそれでは、学科の基礎の学習にはならない可能性が高い。各教師は所定の7.5回分で、にもかかわらず学科の今日的なあり方の概要を示すべく、工夫しはじめている。昨年度もだったが、今年度も試行錯誤が続いている。

授業規模に、クォーター制度の導入以来、より大きな幅がでてきている。＜人間と社会＞部門の授業は人気が高く、総じて履修者が多い事態には変わりがないが、つねに200人という状態からは、脱却しつつある。むろん、まだ教室に学生が満杯の授業もある。教養の大規模クラスに使っているB棟は施設として必ずしも授業をしやすいものではなく、長期的にはもっと効率性の高い階段教室が求められている。大規模クラスで出席を取るとは、必ずしも簡単ではなくまた学生の注意が拡散する。学生は出席点を今日しばしば望んでいるが、学科の理解と、出席の頻度は、この分野では、試験結果を見るかぎり必ずしも対応していない。この部門の科目の人文的性格に起因するものかもしれない。

いずれにせよ、どういう学生が受講しておりどういう形で講義すればもっとも内容の理解が進むか、クォーター制度の導入によって本部門の場合模索すべき課題が多くなったことは確かである。各スタッフはこれについて一層の試行を展開する必要があるだろうし、それへの評価も、短期に判断を下せるような事柄ではない。

今日の大学では、一種の専門学校化が著しく進んでおり、「教養」の意義づけがなされていない。とりわけ理論的、思想的学科を学生に教えることは、日々むつかしくなっている。「教養」科目をなぜ受けねばならないのかわからない、と直接授業の後に訴えに来る学生も多い。今日の受験制度が学生一人一人の学問への「関心」を内発的に育てる形にはなっていないという重大な背景もあり、授業の方法論だけでは処理しきれない問

題がある。試験の採点が2回から4回に増えたこともくわわって、採点スケジュールを充たすこと自体が、一部のスタッフにとっては、時間的にも、体力的にも、すでに限界に達している。そのような状況を考えると部会としては比較的よく健闘していると判断される。

## 項目・観点ごとの記述

### 基準5 教育内容及び方法

5-1【教育課程の編成・実施方針（カリキュラム・ポリシー）が明確に定められ、それに基づいて教育課程が体系的に編成されており、その内容、水準が授与される学位名において適切であること。】

5-1-③： 教育課程の編成又は授業科目の内容において、学生の多様なニーズ、学術の発展動向、社会からの要請等に配慮しているか。

観点に係る状況（150字以上）

配慮している。全体として授業は、「人間と社会」の学習目標を、抽象的な思想・理論から、具体的・経験的事例論まで、多様な学問的手法・視点から追究している。近代科学のディシプリン（社会学、文化人類学、地理学、社会思想史）および現代的課題と具体的なグローバル・イシュー（社会学、文化人類学、地理学、現代社会論、越境する文化、生活環境と技術、学校教育と社会）の双方を視野に、「人間と社会」が担当すべき広範な領域をカバーしている。社会学、文化人類学、地理学は、この両方をできるようスタッフの配置を考えている。

根拠資料

シラバス、教科書、配布資料、映像等教材、コミュニケーションペーパー

5-2【教育課程を展開するにふさわしい授業形態、学習指導法等が整備されていること。】

5-2-①： 教育の目的に照らして、講義、演習、実験、実習等の授業形態の組合せ・バランスが適切であり、それぞれの教育内容に応じた適切な学習指導法が採用されているか。

観点に係る状況（150字以上）

採用されている。授業方法は、授業内容の性格に応じて、映像やグラフ、ビデオ、さらに実験や小集団教育などを使用したものから、すべて講述からなるものまで多様である。授業レジュメと資料は、十分に用意されている。また、シラバスに沿ったレポート課題の設定と指導を行なう、レポートにおいて学生の興味関心のあることを選択させる、毎回、前回の授業内容の復習、再確認をするなど様々な工夫がなされている。

根拠資料

シラバス、教科書、配布資料、映像等教材、コミュニケーションペーパー

5-2-②： 単位の実質化への配慮がなされているか。

観点に係る状況（100字以上）

多人数クラスのため、行き届かない部分も多いが、可能である限り配慮されている。具体的には、それが可能なサイズの授業では、毎回授業に対するコメントを書かせて提出させ双方向的な要素を取り入れることに腐心したり、毎回課題を掲げ学生の自主自習を促したりするなどの工夫が行われている。

根拠資料

シラバス、教科書、配布資料、コミュニケーションペーパー

5-2-③： 適切なシラバスが作成され、活用されているか。

観点に係る状況（50字以上）

作成され、活用されている。また、学生の反応や学習状況を授業終了時のコメントをつうじてその都度確認するなどの工夫がなされている。シラバスは、思想的、理論的科目の場合は、講義の性質上おのずと限界があるが、講義内容について概ねこまかく予告、解説されている。実際の講義も、学生の理解力が毎年必ずしも同じでなく、また、質問に割く時間配分などの問題もあるので、完全にということはありませんが、ほぼシラバス通りに展開されている。

根拠資料

シラバス

5-2-④： 基礎学力不足の学生への配慮等が行われているか。

観点に係る状況（100字以上）

多人数のクラスのばあい、きめ細やかな配慮が行き届かない部分はどうしても多くなってしまいう状況にあることは否めない。しかし、そのような困難な状況のなかでも、基礎学力不足の学生への配慮は、可能な限り実施されている。今日の学生は理論と思想が平均的に苦手であり、これにどう対応するかという課題は残っている。重要な内容を繰り返し説明したり、こまかな補助資料を渡したり、様々に理解を深めるために手がうたれている。

根拠資料

コミュニケーションペーパー、シラバス、配布資料

**5-3 【学位授与方針（ディプロマ・ポリシー）が明確に定められ、それに照らして、成績評価や単位認定、卒業認定が適切に実施され、有効なものになっていること。】**

5-3-②： 成績評価基準が策定され、学生に周知されており、その基準に従って、成績評価、単位認定が適切に実施されているか。

観点に係る状況（100字以上）

成績評価基準についてはシラバスにおいて明示されている。そして、その基準に則った成績評価が適切に実施されている。また、成績評価基準を第一回の授業時に受講生に対し詳しく説明するなどの工夫も行われている。

根拠資料

シラバス、教科書、配布資料、コミュニケーションペーパー

5-3-③： 成績評価等の客観性、厳格性を担保するための措置が講じられているか。

観点に係る状況（100字以上）

講じられている。前述したように、成績評価基準はシラバスにおいて詳しく明示されている。そして、成績評価は試験答案等にもとづき客観的かつ厳格になされており、また、シラバスに掲載された成績評価基準に則った評価がなされている。学生からの異議申し立ても、少ない方である。

根拠資料  
試験答案

## 基準6 学習成果

6-1 【教育の目的や養成しようとする人材像に照らして、学生が身に付けるべき知識・技能・態度等について、学習成果が上がっていること。】

6-1-②： 学習の達成度や満足度に関する学生からの意見聴取の結果等から判断して、学習成果が上がっているか。

観点に係る状況（100字以上）

多人数のクラスもあるため、どうしても一定程度の限界があることは否めない。とりわけ今日の学生は授業を「面白い」、「面白くない」という単純な基準で測りがちであるが、そういう尺度では判断のしようがない学科をこの部門は抱えており、そういう授業についていかに成果を上げるかは、むつかしい課題でありつづけている。しかしながら、ひとりひとりの教員の努力と創意工夫により、受講生の学習成果は上がっている。本大学の学生のポテンシャルの高さでもあろうが、試験の出来は悪くなく、きわめて優秀な答案を書けるまでになる人材も、つねに一定程度存在している。

根拠資料

試験答案、コミュニケーションペーパー、学生アンケート

## 基準7 施設・設備及び学生支援

7-1 【教育研究組織及び教育課程に対応した施設・設備等が整備され、有効に活用されていること。】

7-1-④： 自主的学習環境が十分に整備され、効果的に利用されているか。

観点に係る状況（50字以上）

十分に整備されていない。自主的学習を促進するには、少人数・双方向的授業の展開が必要だが、実際には多人数クラスが多く、その環境は整備されていない。教養の授業に携わる人的資源が少なすぎるうえに、学生が履修すべき総単位数のノルマも明らかに多すぎる状況である。

根拠資料

シラバス、教科書、配布資料、コミュニケーションペーパー

7-2 【学生への履修指導が適切に行われていること。また、学習や課外活動等に関する相談・助言、支援が適切に行われていること。】

7-2-①： 授業科目のガイダンスが適切に実施されているか。

観点に係る状況（100字以上）

適切に実施されている。具体的には、第一回の授業時に詳細なガイダンスを実施する、ガイダンスの内容を記した資料を配布するなどの工夫をおこない、受講生に対し授業科目の詳細な内容が伝わるよう丁寧な説明がこころがけられている。

根拠資料

シラバス、第1回目の授業の配布資料

- 7-2-②: 学習支援に関する学生のニーズが適切に把握されており、学習相談、助言、支援が適切に行われているか。  
また、特別な支援を行うことが必要と考えられる学生への学習支援を適切に行うことのできる状況にあり、必要に応じて学習支援が行われているか。

観点に係る状況（100字以上）

行き届かない部分も当然あるだろうが、可能な範囲で行われている。具体的には、アンケートによる質問を受け付け、授業時において回答する、設定したオフィスアワーを活用する、そのほか個別の支援の要望に対し柔軟に対応するなど、さまざまな工夫がなされている。授業後の様々の質問にも、時間が許すかぎり答えている。

根拠資料

シラバス、コミュニケーションペーパー、学生アンケート